



無題 | アルミ積層複合材に油彩 | H458 × W336 mm | 2015 | ©法貴信也

法貴信也 個展

2015年11月1日(日) — 11月29日(日)

会期中 金・土・日 12:00-18:00 開廊

アポイントメント 承ります

オープニングレセプション：11月1日(日) 18:00-20:00

協力： Taka Ishii Gallery

汚れ

白い紙に鉛筆で線を描く。描いた人が気にいったものになおすために消しゴムを使うと生まれる3つのもの、それは紙(地)、線、そして汚れだ。

一度も間違えなければ、あるいはとても上手に消せれば、汚れは確かめられない。みえるのは線と地という対立だけだ。汚れとは、つまり線になれなかったなにか、または地に戻れなかったなにかであり、そしてまたそれは地と線を緩やかにつなぐ緩衝となる。

ニュートラルな白(地)にバイアスをかけようと、3年ほど前、拭き取った跡を絵に残してみた。これは、地／線の対立をさしあたり無効にするために汚れという緩衝を設けるといふ苦肉の策、方便だったのかも知れない。そして、去年より制作に取り入れた「白の言語化」という考えは、線の修正や汚れのリタッチに使った白の跡を、意識的に描いたものに読み換えていくことだった。白で線を修正してみても、それほどきれいに消えるわけではないので、おのずとそこは汚れになる。また緩衝の汚れを打ち消すためにのせた白は、下の汚れが隠れきると、白の上の白という重複、ムダにみえた。

P.1

こうして汚れは徐々にバリエーションをもつようになり、おのずと作品には前よりも多くて複雑な手の跡が残るようになった。しかし白は元に戻すことであり続け、線はただ描くことであり続けた。と同時に、汚れは緩衝のままだった。

「無敵」を超える

描く、消す、そして消し（または描き）損ないである汚れに触発され、絵は進む。描くことと消すことを意識的と呼ぶなら、汚れは無意識と呼ばれるものに近いはたらきをしていたと思う。ただ、本当の無意識はこんな意図と意図のすきまや影をさししめすものではないだろう。それでもこういったものを無意識と呼ぶことが多いのは、それが「無敵」になるための便利な方便だからだろう。

この場合の「無敵」とは、たんに失敗をしない、または判断を棚上げできるという意味であって、完璧な腕力や能力があるということではない。たとえば、白い立方体の横に黒い立方体をひっつけておき、その間をグレイの帯でグルリと巻く。そうすると、もともとの白と黒の対立はなぜか安定したつながりにみえてくる。ほんの僅かであっても、対立はグレイが挟まることで解消したかのように見える。本当ならぶつかるはずのものがつくるダイナミズムを感覚的に否定し、2つが手を取って行き交うように見える出口のない世界。これがつまり便利な「無敵」なのだ。

汚れが緩衝やバッファだと、絵が閉ざされる。そうならないようにするにはひとまずは線と白（地）と汚れがジャンケンのように「三すくみ」となることだ。それぞれの役割が明白にある上で、実際そこになにがあるのかによって結果が決まるもの。いま一番理想とする自分の絵のあり方はそれだ。線と汚れと白はひとめでそれとわかるにもかかわらず、それがなにであるかは、それぞれの絵ごとに、もっといえば場当たりに決まっていくもの。

白と黒の立方体の間のグレイを異物と考えるということです。

法貴信也

法貴のペインティングは 線、汚れ（レタッチの白）、白色という三つの要素で構成されています。これまで、線の修正や汚れのレタッチに使った「白」を敢えて残し、その「白」が特異な働きをする「白の言語化」を意識しながら制作してきました。本展では、**青緑色をおく→青緑に呼応する形で、茶系と濃紺による2色の線が乗る→余白となるところを中心に白が乗る**、という手法により「白が線を食べ＝積極的な白の言語化」を実現した新作群を発表致します。線・汚れ・白が三つ巴に闘ぎ合う、迫力のペインティングを御体感下さい。

eN arts ロウ 直美

P.2